

会 員 名 簿

榎	本	誠
大	場	恒
加	藤	薫
金	谷	良
竹	内	佑
野	間	一
廣	田	律
復	本	一

編 集 後 記

*最近、どの分野でもプロフェッショナル意識の欠如を痛感させられることが多いが、大学教師も、また、例外ではないのかもしれない。

*大学教師がプロフェッショナルたり得るのは、研究活動の基盤がある、すなわち研究者であるということである。教育面での努力の必要性が云々される昨今ではあるが、大前提として研究活動が要求されていることを忘れてはなるまい。

*二年も三年も論文一つ書かない（書けない）のでは、プロフェッショナルとしての資格を疑われても仕方あるまい。ジャンルによつては、成果があげにくい、などという甘言を、これ幸いと隠れ蓑にしてはなるまい。

*研究活動を放棄した大学教師にとつて、大学ほど住み心地のよい場所はあるまい。大学という場所は、大学運営、大学教育にかかわる仕事を放棄した場合には大いに非難されるが、研究活動を放棄したとて、誰からも非難されることはないからである。まさに天国！ただ忙しがつてさえいればいいのである（事実、忙しいこともあるのだが）。

*我々「麒麟」のメンバーは、プロフェッショナル意識、研究者意識を保持していくことを互いに再確認しようではないか。

*ここに「麒麟」第六号をお届けする。いくつの論文が、学界（学会）に波紋を投げかけ得るであろうか。大いに楽しみである。